

メディカルタウンの地方(ぢがた)学

「30 年後の医療を考える会第 2 回全国シンポジウム」開催

2008 年 2 月 24 日(日), 「30 年後の医療を考える会第 2 回全国シンポジウム」が聖路加看護大学(東京都中央区)において開催された。

秋山正子(白十字訪問看護ステーション所長)氏の開会の挨拶の後, 第 1 部が村上智彦(夕張医療センター理事長)氏による基調講演を皮切りに行なわれた。村上氏は限界自治体と呼ばれる夕張は将来の日本の縮図であると強く警鐘を鳴らし, 「医師はこれまで『命を守る』という needs に応えるよりも患者の wants に応えてきてしまった結果, 過剰な期待をかけられるようになってしまった」と語った。続いて, 宇都宮宏子(京都大学医学部附属病院地域ネットワーク医療部看護師長)氏や安中中和(長崎在宅 Dr. ネット理事)氏が発言を重ねた。村田由佳(東京都福祉保健局高齢社会対策部在宅支援課長)氏はこれから急速に高齢化を迎える都民に自主性がないことを警告する一方, 都としても東京の強み・弱みを活かして高齢者対策を推進していくと発表した。なお, 鈴木信行(鈴木医院院長)氏も発表の予定だったが, 折からの強風のため新幹線がとまり, 資料を秋山氏が代読した。

第 2 部のパネルディスカッションは秋山氏のほかに中村順子(日本赤十字秋田短期大学看護学科准教授)



氏をコーディネーターとして進められた。「主治医と副主治医の制度をとることで患者だけでなく医師同士も安心できる」(安中氏)など各演者が自説を補強するなか, このシンポジウムの特長ともいえる会場との質疑応答が始まった。生活を送るうえでの患者・家族と医師の連携, 核家族化の進む東京における介護力の消失など, 議論が深まるなか, 鈴木氏が到着し, 拍手に包まれた場面もあった。

閉会の挨拶は今回のテーマ, 「地方(ぢがた)学」を推薦した樋野興夫(順天堂大学医学部病理・腫瘍学教授)氏によるもの。「2 人に 1 人が 75 歳の地域が存在しているのだから, モデルとして学ばねばならない」として閉会となった。